

佳作

ぼくは食べるのが苦手

兵庫県 姫路市立英賀保小学校三年 塩谷 空大

ぼくにとって食べられない世界が突然やってきた。ぼくは、ご飯を飲み込むのが苦手。ご飯粒を五粒ぐらいずつなら少し安心して食べられる。あめやめん類などは絶対食べられない。前は大好きでたくさん食べていた。

食べられなくなったきっかけは、去年の十一月。あめを口に入れて、ソファにすわったとたん、あめがのどにひょいとつままった。一しゅんの出来事だった。お父さんが、すぐにぼくの体をさかさにして、トントんしながら、

「早くきゅうきゅう車よんで！」
と、お母さんに言った。苦しかったけど、いきは出来ていたので、お母さんが相だんセンターに電話してくれて、少しずつ落ちついた。すごく怖くて、その事がきっかけで、食べ物を飲み込む事が苦手になってしまった。その後も、ずっとのどにいわかんが

あって、あめがのどにくっついたままなのかもしれないと不安になった。お母さんは、ぼくを何度も病院につれて行ってくれた。でも食べられない事に変わりはなかった。大きな病院を紹介してもらえなくなった。病院の先生に、

「同じ様なきっかけで食べられなくなった子どもさんは少なくないですよ。」

と言われた。ぼく以外にも同じような子がいる事に、自分だけじゃないんだと安心した。

ぼくが一番辛いのは、給食の時間だ。給食の時間が近づくと、みんなはうれしそう。でも、ぼくはゆううつな気持ちになる。

ある日の給食の時間、頑張って食べようとしたけれど、飲み込めなかった物を吐き出してしまったところを友達に見られてしまった。はずかしいし、変だと思われているかもと不安になった。でも、その友達に次の日に、

「今日はたくさん食べてすごいやん。」
とか、

「これおいしいから一緒におかわりしよう。」
と、声をかけてくれて、その友達のやさしい声かけに、とても心があたたかくなった。

担任の先生も、いつも気にかけてくれて、

「つづきを保健室で食べてみる？」
と言ってくれて、時間をかけると全て食べきれたので、やったぞという気持ちになれた。

食べられる事が当たり前ではないという事をきっかけに、ぼくは二つの事に気付いた。一つ目は、たくさんの人々のやさしさだ。食べられない時にかけてもらったやさしい言葉は、一生忘れないと思う。二つ目は、食べ物の大切さだ。田舎のおじさんの作った米、おばあちゃんの畑で育てた野菜、肉や魚、全て命ある物をいただいて、ぼくの命があるという事を忘れずにいたい。

今は、まだ食べるのが怖い物もあるけれど、食べられる物も増えてきた。いつか、そんな事もあったねと言いながら、お腹いっぱい食べる事を楽しめる時が来るといいなと思う。今をのりこえて、ぼくを助けてくれた人々に、やさしさのおんがえしをしたと思う。